7年前の思い出

いまから7年前、2016年3月に宮本憲一先生が学士院賞を受賞された。先生の大著『戦後日本公害史論』をはじめ長年の公害・環境研究によるものである。

受賞に関わる多くの行事に参加した。まずは4月16日に京都嵐山で開かれた卒業生らによる「お祝いの会」。このときに忘れられないのが、水田洋先生と名古屋のご自宅までご一緒したことだ。タクシーや新幹線のなかで、水田先生から加藤周一さんらの話をお聴きすることができた。ご自宅で書斎と書庫を見せてもらった。

9月4日に立命館大朱雀キャンパスで開催された記念シンポジウムでは、水田先生のご自宅から会場までご一緒した。猛暑のなか3時間余りの「道中」で、興味深い話を聴くことができた。写真は祝賀会の水田先生らしい挨拶。このあと宮本先生がマイクをとり、水田先生が97歳になられたことを紹介すると、会場からは大きな拍手がつづいた。残念ながら先生は先月3日に亡くなられた。

10月15日午前、名古屋大学の学術講演会で行なわれた宮本先生講演にも参加した。先生は「日本公害史の教訓とアジアと現代の日本へ」というテーマで、パワーポイントを使って講演された。『恐るべき公害』から50年にわたる研究成果『戦後日本公害史論』の社会的意義、そのアジアでの評価から話は始まった。講演後の南川秀樹・元環境省事務次官らとの討論で、自動車や中国の環境問題など興味深いやりとりもあった。

11月19日には写真の「名古屋大学レクチャー―2016」が豊田講堂で開催された。広い会場は参加者で一杯だった。宮本先生は「持続可能な社会への道―戦後公害の歴史的教訓から」と題し、90分にわたりパワーポイントにより鋭く問題を提起した。

安倍内閣の冷戦を進める安全保障政策、原発再開・輸出政策、異次元の金融財政政策による経済不安、改憲による戦後民主主義の危機に懸念を示す。危機の時代にあって、足もとから維持可能な社会を展望するために内発的発展を提唱し、その実践に期待を寄せた。宮本先生は座右の銘のひとつ、ブレヒトの「ガリレオ・ガリレイの生涯」の言葉で、講演を締めくくった。「私は、科学の唯一の目的は、人間の生存条件の辛さを軽くすることにあると思う」

とりわけ現代の科学者にふさわしい言葉だ。7年前から、いまも学ぶことは多い。

（2023年3月21日）